

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 40

パゾリーニ生誕 100 年

堤 康徳

2022 年はピエル・パオロ・パゾリーニ (Pier Paolo Pasolini, 1922-1975) の生誕 100 年にあたる。2001 年から毎年ゴールデンウィーク中に開催され、今年で 22 回目を迎えたイタリア映画祭(今回は渋谷のユーロスペースが会場となった)でも、パゾリーニの映画監督デビュー作『アッカトーネ』(Accattone, 1961)がリバイバル上映された。



【『アッカトーネ』の一場面。主演のフランコ・チッティ】

出典: <https://it.wikipedia.org/wiki/Accattone>

パゾリーニは、日本ではとりわけ、詩人、作家として以上に映画監督として知られる。すでに 1999 年に、主要作品すべてを上映するパゾリーニ映画祭が、やはりユーロスペースで開かれている。

『アッカトーネ』と第 2 作『マンマ・ローマ』(Mamma Roma, 1962)では、小説『生命ある若者』(Ragazzi di vita, 1955)や『激しい生』(Una vita violenta, 1959)と同じく、ローマの下層民の

救いのない生活が描き出される。『アッカトーネ』の主人公は、accattone(物乞い)というあだ名の、娼婦のヒモとしてその日暮らしをする若者、『マンマ・ローマ』の主人公は、息子のために売春から足を洗う決意をする娼婦のマンマ・ローマである。

過剰な生命力を謳歌しているかに見えるパゾリーニ映画のヒーローたちは、足早に死の世界へと去ってゆく。生と死を隔てる明瞭な境界線はない。生と死の世界は、夢という回路でつながっている。初期のネオレアリズモ的な作品からすでに、死の予兆としての夢が語られ、その夢のとおり主人公たちはあつげなく死んでしまう。それはまるで、パゾリーニ自らの非業の死を予告するかのようでもあった(『ソドムの市』公開直前の 1975 年 11 月 2 日、パゾリーニはローマ近郊のオスティアの海岸で殺害された)。アッカトーネは、バイクで警察から逃れる途中トラックと衝突死、マンマ・ローマの息子は、ラジオを盗んだあと独房のベッドで母親の名を呼びながら死んでゆくのだ。

アッカトーネは死の前夜、ふしぎな夢を見る。それはこんな夢である。喪服姿で花束をもった友人たちに呼ばれ、あとをつけてゆくと、「アッカトーネは死んだ」と言われる。彼だけが墓地の入り口で足止めをくい、塀を乗り越えてなかに入ると、彼の墓を掘っている男がいる。背景には広い渓谷が見える。アッカトーネは、影になった場所に穴を掘るこの男に、もっと日向に掘ってくれと頼む。

一方、『マンマ・ローマ』では、娼婦の仕事から足を洗い、新しい生活を始めたばかりの女主人公が、カンツォーネに合わせて息子のエトレと踊り

ながら奇妙な夢の話をする。ローズマリーが一面に生えるギリシアの山中にいた彼女が、夫の声に導かれて山の反対側まで歩くと、そこには看守の姿をしたエツレがいて、彼女を投獄しようとしたので必死に逃げた、と。この夢は、イメージを通してではなく、彼女の口から語られるにすぎないが、エツレの死を予告する夢であろう。ラジオを盗んだあと、母親を呼びながら独房のベッドで死んでゆくエツレの姿は、よく知られているように、足の裏を見せて横たわるマンテーニャの絵画『死者のキリスト』と同じ構図のなかにとらえられる。

生から死への移行があっけなく行われるのにたいし、マンマ・ローマが夢見たような社会階級の移行は、乗り越えがたい壁に阻まれてしまう。いわば「命がけの跳躍」は、失敗に終わるのである。

中世の物語を題材とする「生の三部作」『デカメロン』(*Il Decameron*, 1971)、『カンタベリー物語』(*I racconti di Canterbury*, 1972)、『アラビアンナイト』(*Il fiore delle Mille e una notte*, 1974)は、性の讃歌が中心に据えられているとはいえ、ここでも生ではなくむしろ死の影が濃厚である。『デカメロン』でパゾリーニは、ボッカッチョの原作全100話のなかから10篇を選び、舞台をすべて猥雑な生命力にあふれたナポリに移し、おもに性とエロスを通じて人間の裸形を奔放に描いてみせた。だがこのなかにも、愛と死の物語がとりいれられている。原作の第4日第5話を題材にしたエピソードがそうである。リザベッタは3人の兄弟に恋人のロレンツィオを殺される。ロレンツィオは、リザベッタの夢のなかに現れ、自分が埋められた場所を告げる。彼女は森で恋人の遺体を見つけ、首を切断してもち帰り、バジリコの鉢に埋めて保存するのである。彼女の夢は、未来の予言ではなく、真実を解き明かすものだが、やはり夢は死の世界への通路として機能している。

『デカメロン』の最後で、ジョットの弟子に扮したパゾリーニはこうつぶやく。「作品を夢見るだけでこんなにすばらしいのに、なぜそれを実現させなくてはならないのか」。

また、『アラビアンナイト』のある登場人物には、こんなことを言わせている。「真実はひとつの夢のなかではなく、たくさんの夢のなかにある」。

パゾリーニの映画はいずれも、いくつもの夢の断片がつなぎ合わされたモザイクなのかもしれない。

パゾリーニが殺害されてから3週間後にパリで初上映された『ソドムの市』(*Salò o le 120 giornate di Sodoma*, 1975)は、サドの小説が原作である。このパゾリーニの遺作は、私にとって、夢は夢でも巨大な悪夢だった。大学入学直前に池袋文芸坐で初めて見たとき、残酷なシーンの数々に何度も目をそむけた。この作品の主要テーマもまた性ではある。だが、「生の三部作」のあのあつけらかんとした牧歌的な性の描写は一切ない。

パゾリーニはこの映画の時代と場所を、第二次世界大戦末期にナチスの傀儡政権(イタリア社会共和国、通称サロ共和国)が誕生したサロ(イタリア北部のガルダ湖畔の町)に置きかえた。政権中枢にいる4人のリベルタン(放蕩者)が、反ファシストの家庭の少年少女を連行し、凌辱のかぎりをつくす。内容の猥褻性、描写の過激さと残虐性ゆえに、プロデューサーのアルベルト・グリマルディはいくつもの訴訟を起こされた。『ソドムの市』撮影中に行われたインタビューでパゾリーニ自身が語るところによれば、「性はここでは、権力と、権力に服従する者との関係の隠喩¹」であるという。この映画で描かれた性愛は、もはや反社会的な生命力や喜びの表出ではなく、権力のメタファーであり、身体は、社会によって消費される物にすぎない。

カルヴィーノは、1975年11月30日付『コッリエーラ・デッラ・セーラ』紙上に発表された記事「サドは私たちの内部にいる」(*Sade è dentro di noi*)において、『ソドムの市』を痛烈に批判した。それはまず何よりも、パゾリーニが時代背景を原作のルイ14世治下から、第二次世界大戦末期のサロ共和国に移し変えたからにはほかならない。

まず初めに断っておかねばならない。サドの小説の舞台を、ナチ・ファシストの共和国の時代と場所に設定するという発想が、あらゆる視点から見て最悪だと私には思われる、と。その時代を生きた多くの人々の記憶のなかにある

おぞましい過去は、サドが描いたような、つねに現実性の埒外に置かれた象徴的、空想的なおぞましさを背景として使うことは許されないと。²

カルヴィーノは、サドの小説世界が、あくまでも、空想上の仮説、文学的虚構の水準にとどまるべきものと考えている。たとえそれが、人間の心と社会の秘部に触れるものであるとしても。ナチ・ファシストによる住民の虐殺のあったマルツァボット村の道路標識がスクリーン上に映しだされたとき、カルヴィーノはとてもいやな気持ちになったと告白している。自らが武器をとってパルチザンとしてレジスタンスを戦ったカルヴィーノの言葉だけに、ここには無視できない重みがあると思われる。

ロラン・バルトもまた、この映画に「ファシズムとサディズムの大雑把なアナロジー」³を認めている。

もうひとつの重要な論点がある。サドの小説の根底にあったとカルヴィーノが考える金銭(denaro)についてである。サドは金銭による退廃を強調しているにもかかわらず、この点について、パゾリーニはあいまいな態度をとっていると指摘する。4人の放蕩者とその宮廷の関係を信憑性のある今日的なものにする唯一の方法は、金銭こそがその主な道具だった点を明白にすることだった、と。

そうすることによってのみ、パゾリーニは、自らのドラマの主要テーマを語るにいたったであろう。つまり、彼が成功した映画監督となってから、金銭が彼の人生において果たした役割についてである。⁴

この最後の主張はどうだろう。映画で商業的な成功を手中に収めた同年代の作家へのあてこすりのように聞こえないこともない。この記事が発表されたとき、パゾリーニはすでに他界していた。カルヴィーノに反論したのは、パゾリーニと親しかったモラヴィアである。12月6日付同紙に「パゾリーニにとってのサド、社会にたいする石」(*Sade per Pasolini, un sasso contro la società*)と題された記事を寄せ、カルヴィーノを批判した。これにた

いしカルヴィーノは、「パゾリーニについて:モラヴィアへの返答」(*Su Pasolini: una risposta a Moravia*)を12月10日付の同紙に掲載する。このなかでカルヴィーノは、「私は決してパゾリーニが墮落したとは言っていないし、そう思ってもいい」と述べたうえで次のように書いた。

サド侯爵は、貴族の特権が異議申し立てを受けてはいたとはいえ、すべてが金で買えるという原則が肯定される時代に生きていた。(中略)パゾリーニがクローズアップするのは、強制権の側面であり、売買の側面ではない。だからこそ、外国軍の占領によって保護された専権体制下に舞台を設定したのであり、私が批判したのはこの選択である。なぜならサドの小説のように、城内のおぞましいできごとが平和な時代において展開していたならば、映画の今日的な衝撃はより強かつたはずだから。⁵

サドの原作小説において重要な要因だった性と金銭の関係についてパゾリーニが沈黙しているというカルヴィーノの批判の妥当性については、今後さらなる検討が必要だと思われる。

本稿は以下の拙文と内容が重複する箇所があることをお断りしておく。

- 1.「パゾリーニ映画を読む愉しみ」『キネマ旬報』(1999年5月上旬号)
- 2.「イタリア文学における同性愛——ダンテからトンデッリまで——」『上智ヨーロッパ研究』(第10号、2017年、上智大学ヨーロッパ研究所)

註

- ¹ Pier Paolo Pasolini, *De Sade e l'universo dei consumi*, in *Per il cinema*, Milano, Mondadori, 2001, tomo II, p. 3019.
- ² Italo Calvino, *Saggi*, Tomo II, Milano, Mondadori, 2007, p. 1933.
- ³ Roland Barthes, *Le Monde*, Paris, juin 1976, ora in Luciano De Giusti, *I film di Pier Paolo Pasolini*, Roma, Gremese, p. 149.
- ⁴ Italo Calvino, *op.cit.*, p. 1935.
- ⁵ *Ibid.*, pp. 1937-1938.

(上智大学准教授)

自転車レースとカトリック

谷口 和久

しばらく前に、バチカン市国が国際自転車競技連合(仏語で Union Cycliste Internationale、以下 UCI)に加盟したというニュースが流れていた。

UCI は、文字どおり国際的な自転車競技をつかさどる団体で、オリンピックや世界選手権など大きな大会は UCI に加盟していないと出場することができない。バチカンの自転車チームがオリンピックをめざしているとは思えないが(失礼!)、そもそも人口 600 人あまりの小国で、しかも大半は聖職者だが、チームを編成できるほどの競技人口がいるのだろうか? スイス衛兵もバチカン籍なので、彼らならそれなりに走れそうだが…

そんな疑問はさておき、記事の中で紹介されていた教皇ヨハネ・パウロ1世の言葉が目を引いた。

すべてのスポーツが人間的であるとすれば、自転車レースはもっとも人間的である。

ヨハネ・パウロというお名前を聞くと、ポーランド出身のヨハネ・パウロ2世がわれわれ日本人にはなじみ深いが、ヨハネ・パウロ1世はその前任の教皇である。1978年に教皇に選ばれて、バチカン銀行の不正改革など表明されていたが、在位わずか 33 日で急逝された。そのあまりに早い逝去ゆえ、暗殺説もある。この一件は映画『ゴッドファーザー3』の題材となるほど、スキャンダラスな出来事であった。

ゴッドファーザーはさておき、ヨハネ・パウロ1世の言葉には、なにかしらカトリック的な視点というか、あたたかみを感じられる。



【ヨハネ・パウロ1世】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Papa_Giovanni_Paolo_I

偶然かもしれないが、自転車レースが盛んな国 — イタリア、フランス、スペイン — はいずれもカトリック国だ。

もちろんいずれの国でも自転車よりサッカーの方が人気があるし、サッカーに関していえば、カトリック国にかぎらず、プロテスタント国でも(どうか宗教を問わず)たいへん盛んである。しかしながら、自転車レースが文化として根つき、その価値が広く認められているということ言えば、これらカトリックの3か国だろう。

サッカーが華やかでスマートなのに対し、自転車レースはいくら機材が進化したとはいえ、ひたすら忍の字のスポーツだ。先の記事の中で、別の司教は「自転車レースおよびその鍛錬は、私たちが主に近づける。」と語っている。自転車レースのストイックさは、ある種、宗教的といえるかもしれない。

また、UCI のラパルティエント会長はバチカンの加盟に際し、次のように述べている。

自転車レースは、友愛・きずな・敬意・愛といった普遍的な価値を伝える手段であり、これらは UCI の使命でもある。

自転車レースにおけるチームプレイは、たとえば野球やラグビーなど他のチームスポーツと違って、はたから見て非常にわかりづらい。一見すると、マラソンなどと同じような個人競技に見える。だが、アシストと呼ばれる大半の選手たちは、自チームのエースの風よけになったり、エースの自転車が故障したときなど自分の機材と交換してあげたりと、おのれの成績よりエースのために奉仕すること、ひいてはチームに貢献することが求められる。キリスト教でいうところのアガペー、すなわち無私の愛、自己犠牲の愛だ。

日本の小説で自転車レースをテーマにしたその名もずばり『サクリフェイス』（サクリフェイスは英語で「犠牲」の意）という本がある。結末の「犠牲」はかなり衝撃的で、ネタバレになるので詳細は割愛するが、本文中でもアシストの役割が随所に描かれていて、やはり自転車レースといえば犠牲の精神ということになるのだろう。

*

自転車レースが文化として根づいていく過程で、カトリックとのつながりが後押しとなったことは間違いないだろう。ことに自転車レースの黄金時代といわれる40～50年代、敬虔なカトリック信者でもあった名選手ジーノ・バルタリ（Gino Bartali）の存在は大きい。

「敬虔なるジーノ Il pio Gino」とよばれたバルタリは、レース前に祈りをささげるのはもちろんのこと、他チームの選手までミサに引き連れられたり、祈祷時に教会の固い床に長い時間ひざまずいて、足を痛めるのではないかとチームメイトに心配されたりするほどであった。

そんなバルタリを、時の作家クルツィオ・マラパルテはこう評した。

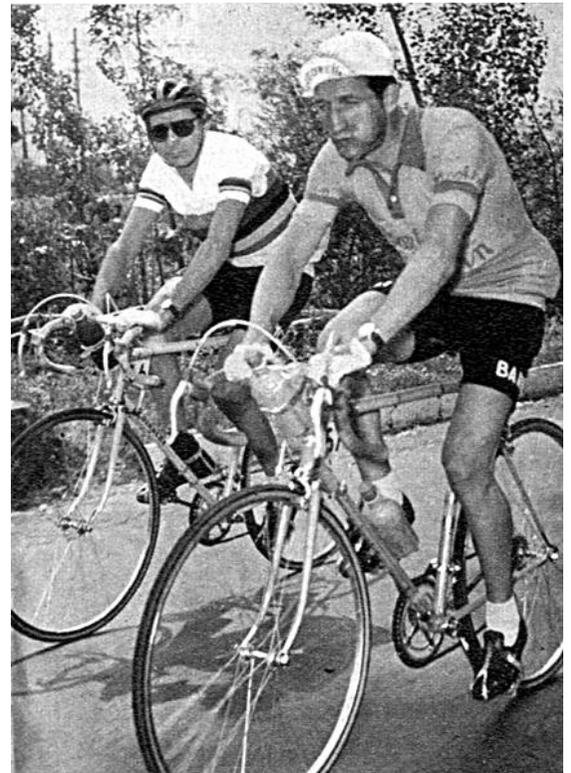
バルタリは来世を信じ、天国を、贖罪を、そしてイエスの復活を信じる。

かたや、バルタリのライバルだったファウスト・コッピ評はこうだ。

コッピは合理主義者、懐疑主義者であり、信じるものはおのれ自身のみ、すなわちおのれの筋肉、おのれの肺である。

こんにちから見れば、コッピ評のほうがスポーツ選手のありようとしてごく当たり前に思われるが、前後の文章を読むと、コッピに対してはおおむね批判的で、バルタリに対してシンパシーが感じられる内容となっている。ここでいう合理主義者、懐疑主義者という文言も、マラパルテにおいてはネガティブなニュアンスがこめられていることに注意しなければならない。

これが書かれたのは1949年。第二次大戦が終わってからまだ日の浅いころで、戦前の余風が残っていたこともあるだろうし、またマラパルテ自身もともと守旧的なスタンスだったことも多分にあると思われる。



【肩を並べて走るコッピ（左）とバルタリ】

出典:

https://it.wikipedia.org/wiki/Rivalit%C3%A0_Bartali-Coppi

時代の流れはあきらかにコッピのような合理主義で、彼が行った科学的トレーニングや戦略的なレース運びなどは、現代のスタンダードとなっている。

かたや、バルタリのようなスタンスは、こんにちの視点で見れば、迷信的ということになるだろう。しかしながら第二次大戦をはさんで2度のツール・ド・フランス総合優勝。しかも2回目の1948年の快挙は、共産党書記長トリアッティの暗殺未遂事件でゆれていたイタリアの国情をひとつにまとめたという。もはやスポーツの枠ではおさまりきらない存在となっていた。本当かどうかわからないが、バルタリが買い物をしたり飲食をしたりしても、どの店も金を受け取らなかったというような逸話もあるほどだ。

時の教皇ピウス12世もバルタリへの称賛を惜しまなかった。ミサでもおりにふれてバルタリを例に挙げて、努力のすばらしさを訴えた。

1950年のジロ・ディ・イタリアは、最終ゴールがローマで、終了後に選手たちは教皇に謁見することになっていたのだが、この大会でバルタリはあいにくの2位であった。優勝はスイス人のユーゴ・ゴブレで、物の本には「カルヴァン主義者が勝者として教皇に謁見した」と残念そうに(?)書かれている。

ギザツロ教会(Madonna del Ghisallo)をサイクリストの守り神として布告したのもピウス12世である。布告は1949年というから、バルタリのツール優勝から間もない時期だ。バルタリやコッピたちがローマからリレーで聖火を運んだという。布告に際し教皇は、啓蒙や救済といったカトリックの思想によるスポーツの実践そして努力が神のもとへ導いてくれると説いた。

[参考文献]

Giuseppe Nardini, *La bici d'epoca, L'Eroica*, 2009

Gioachino Gili, *Coppi e Bartali gli eterni rivali*,

DeAGOSTINI, 2009

『サクリフェイス』(近藤史恵著, 新潮社, 2010)

『イタリアの自転車工房』(砂田弓弦著, アテネ書房, 1994)

『イタリアの自転車工房物語』(砂田弓弦著, 八重洲出版, 2006)

『俺たちはみんな神さまだった』(ベンソ・マヨ著, 安家達也訳, 未知谷, 2017)

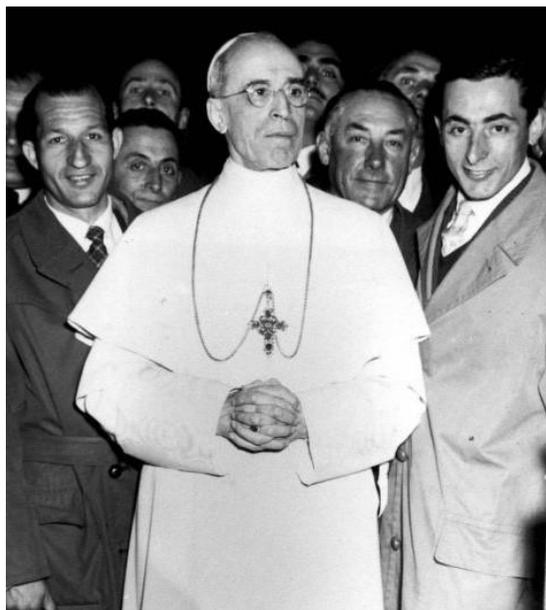
『ローマ法王』(竹下節子著, 筑摩書房, 1998)

『世界の宗教 愛と裁き カトリック』(会田雄次・谷泰著, 淡交社, 1969)

『聖書入門』(ピエール・ジベール著, 遠藤ゆかり訳, 創元社, 2000)

“L’Athletica Vaticana entra nell’UCI: è la squadra ciclistica del Papa” @sedondamanoitalia 29/10/2021

<https://www.secondamanoitalia.it/muoversi/athetica-vaticana-uci-roma/>



【ピウス12世をはさんでバルタリ(左)とコッピ(右)】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Papa_Pio_XII

(当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>